

漢詩を味わう

第104回

少情却似總無情
唯覺樽前笑不成
燭有心還惜別
替人垂淚到天明

白居易
長恨歌



贈別（其の二） 杜牧

多情卻似總無情

多情は却つて似たり 総て無情なるを

惟覺罇前笑不成

惟だ覺ゆ 罇前 笑いの成らざるを

蠟燭有心還惜別

蠟燭 心有り 還た別れ惜しみ

替人垂淚到天明

人に替つて 涙を垂れて天明に到る

深い感情は、かえつてまるでつれない心に似てしまう。

ただこの別れの酒たるを前にして、笑おうとしても笑えないでいる。

その酒宴を照らす蠟燭も別れを惜しむ心があるように、

私の替りに夜が明けるまで涙を流してくれている。

《多情》 深い情け。感じやすい心。気が多いことではない。

《惟》 ただ。唯と同義。

《覺》 自覚すること。

《罇》 樽と同じで、ここでは別れの酒たる。

《心》 蠟燭の芯と人の心をかけていったもの

《替》 ……にかわつて。また俗語的な用法で……のために。

《天明》 夜明け。

杜牧（八〇三—八五二）は京兆万年（陝西省西安市）の出身で晩唐の詩人です。祖父が宰相を勤めた名門の出身で、二十六歳で進士に及第し前途を嘱望されましたが、三代半ばで弟が眼病になり退職したため奔走し、地方官職を歴任しました。揚州在任中には歌舞を好み風流を追つて享樂的な生活を送つたこともあつたようで、そんな華やかなりし時代を振り返つて詠んだ詩が残されています。杜甫を「老杜」と呼ぶのに対して杜牧は「小杜」と呼ばれ、また李商隱と並んで「李杜」と称されました。

この詩は一般的に送別詩に分類されます。送別詩はさらに「送別」と「留別」に大別され、旅立つ人に詩を作つて送る詩を「送別」といい、旅立つ人が詩を残すものを「留別」といいます。「送別」の詩が圧倒的に多いようですが、この詩は、杜牧が揚州を離れるときに馴れ親しんだ妓に贈つた「留別」の詩です。

杜牧の詩といえば「千里鶯鳴いて緑紅に映ず」の名句で知られる「江南の春」を真っ先に思い浮かべる方が多いと思います。杜牧は特に七言絶句に優れ、対象の特筆を的確に見定める着眼力と、それを詩句にまとめる造句力の両面においてその手腕を発揮しています。その垢ぬけたセンスはたつた一句で脱俗の世界、幽玄な境地に誘う魅力があります。

この詩の冒頭の一句は、杜牧は涙ひとつ流さずに別れの宴席に臨んでいて、それは万感の思いが胸に迫つて黙り込みがちになり、逆に何の感慨もないかのごとく見えるだけです。余りにも悲しい時にひとはかえつて無感情な状態になるといった心理を表現しています。傷つきやすい心の自己防衛本能ともいふべき心の機微を、七文字で言い尽くしているところに素晴らしさがあります。

そして後半には、その宴席を照らす蠟燭の芯を心につけて、流れるろうを自分の涙に見立てて表現するという巧みな比喻を用いています。

この詩を贈られた女性はよほど感動したことでしょう。杜牧のプレイボーイ的な一面が垣間見える美しい詩です。

参考文献：唐詩鑑賞字典（東京堂出版）・漢詩の字典（大修館書店）・唐詩三百首（平凡社）

南山雪未だ盡きず 陰嶺残白を留む 西澗冰已に銷え 春溜新碧を含む 東風来ること幾日ぞ 蟄動き萌草拆く 潜に知る陽和の功
 一日も虚しく擲たざるを

南山雪未だ盡陰嶺
 残白西澗冰已銷
 春溜含新碧東風
 来事日蟄動萌
 草拆潜知陽和功
 一日不虛擲

《大意》終南山では雪が消えさらず、北向きの嶺には白いところが残っている。しかし西の谷川では水がとけて、春の水たまりが青くなっている。東から春風はいつ吹くか、冬ごもりの虫が動きだし草の芽も萌えた。陽春の気が一日も無駄にしないことが、これでわかる。(白居易詩「溪中の早春」前段)

陽春德澤を布き 萬物光輝を生ず

陽春布德澤
 萬物生光輝

長歌行

陽春布德澤
 萬物生光輝

長歌行

《大意》麗らかな春がやって来て、日の光と水をたっぷり恵んでくれたので、万物はみな光り輝いて生長している。(古楽府「長歌行」)

世 淡
榮 然
忘

読み

淡然^{たんぜん}として世榮^{よえい}を忘る (心は淡々として世俗の榮華を超越する・王統)

佐藤象雲書

横画を縦画で四等分するように

旁は上下の中心を整え
下の「火」を暢びやかに

冠は火を堂々と頂くが重くならないよう

「夕」がねると横広がりになり
「犬」との一体感を持たせにくい

それぞれの「点」の位置取りに注意

今月はさまざまな「点」が登場するが
角度や長さ、または強弱の変化などを
よく考え工夫して臨機応変に使い分け
をしたい。



一般部規定課題出品について

- 規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
- 初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
- 規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

世榮
淡然忘

世榮
淡然忘

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

野塘春
草徑

世榮
淡然忘

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

音

コウカイケイテイ
ドウキレンシ

略解

孔ははなはだ。兄弟は特別に親しみ愛すべきで
枝葉が一本の幹から分かれたように一身同体である。

孔 懷 兄 弟 同 氣 連 枝
孔 懷 兄 弟 同 氣 連 枝
孔 懷 兄 弟 同 氣 連 枝

佐藤象雲書

支 部		順 位		氏 名	
<p>野蒜とふ愛と多地名あるを知る</p>					
<p>被災地等を深く覚える</p>					

皇后陛下御歌 平成二十九年(出典:宮内庁ホームページ)

和泉溪石先生書



改、孔子近聖……

■ 禮器碑らいぎひ

(後漢・西暦一五六年)の臨書 (5)

象雲臨

『改孔子近聖』

隸書は秦時代の程邈ていぼくという獄吏が忙しい公務に対処するため、民間に流通していた篆書を書きやすいように整理して作ったものという説があります。篆書を簡約にした書体で当時
 は一種の俗字体であったといえます。隸書の歴史的な位置づけは、篆書から楷書に至る過渡期の橋渡しの役割を果たした書体といえます。また筆法的には篆書に近いものの、結構からいえば楷書に近いために読みやすく、さらに装飾性もあり実用と美観の両方を兼ね備えている書体です。

今月から本誌連載予定の「漢字の基礎知識」と関連することですが、中国の成語に「約定俗成やくじょうそくせい」という言葉があります。これは「習わしがやがて社会的習慣として定着して一般化する」という意味ですが、はじめは俗とされた書体が、この禮器碑のように書体として頂点を極めた時期には最もフォーマルな書体として、多くの碑が残されていることは文字の変遷という観点で大変興味深いことです。

若合一契

一契を合するが若し

一若合一契

象雲臨

■王羲之・蘭亭序（東晋三五三年頃）の臨書（30）

『若合一契』

蘭亭序には様々な逸話が残されています。そのなかで盛唐時代の何延之かえんしが著した「蘭亭記」は、蘭亭の出来た経緯から、太宗が辯才が所有する蘭亭序をだまし取った賺蘭亭たくらんていの話、そして太宗が臨終にさいして高宗に蘭亭序を陪葬するように遺言したことなど小説仕立てで記述されていて、蘭亭序の伝説化に拍車をかけました。

書聖王羲之の素晴らしさは現代に至るまで喧伝されながら、真蹟が現存しない書をどのようにして学んでいくかは難しい問題です。王羲之の再来とまでいわれた米芾が顔真卿から始まり様々な書を学んだ結果、最後に王羲之に行き着いたように、様々な古典を臨書しながら、王羲之の書の位置付けを確認することも一方法で、恩師大島崑山先生は「後世の書人の目を通して王羲之を見る」というようなことを述べられていました。王羲之の尊崇の書論孫過庭の「書譜」や王羲之の尺牘を生涯わたって臨書した王鐸の書を学ぶことも、王羲之を学ぶということに通じると思います。